



巻 頭 言

意 欲

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
社団法人 日本植物防疫協会 理事長

管原敏夫

初めて中国を訪れたのは昭和53年初夏のころであった。四人組の逮捕から2年もたっていない、壁に書かれたスローガン「農業は大寨に学べ」が色あせたまま残っている頃で、その年のはじめに4つの近代化するなわちく今世紀末までに農業、工業、国防、科学技術の4つの近代化を成し遂げる」との目標を全国人民代表会議で決議されていた。また、農業技術では胚培養による稲育種が盛んに行われているところであった。当時北京ではアメリカ人の団体が多く皆ジャルパックできていた。日本人は少なかったが通訳の中国女性日本人と中国人は目を見ればすぐ見分けがつくという。中国人の目は光がないが日本人の目は輝いているという。その通訳の目は輝いていたが多くの中国人は文化大革命終了後日が浅いこともあり、新しい目標に向かって働く意欲が乏しかったのであろう。最後に中国を訪れたのは8年程前であり最近の中国の事情に疎いが、目の輝きは日中で逆転している例も多いのではないかと考えてくる。長引く不況のなかで日本人は自信と意欲を減退させ、一方市場経済を取り入れた中国では人々が生活向上の機会がふえ意欲を燃やしているのではないか。

ところで、我が国の農業はどうか。生産性と所得の農工間格差の是正を目標とした現行の農業基本法が新しい食料・農業・農村基本法に置き換わることになった。新しい基本法には、多面的機能の発揮、農村の振興など新たな理念もつけ加えられた。そのなかで農業関係者が大きく期待しているもののひとつが食料自給率の目標策定であろう。現在40パーセントそこそこまで落ち込んでいる自給率を相当程度引き上げる

よう目標を設定すべきとの強い希望である。自給率の目標は農業生産と食料消費の指針として定めることとされているが、農業者の生産意欲の向上と自覚なしには生産増大は困難であろう。

とくに、自給率アップの本命とされる麦、大豆、飼料作物にあってはそう思える。農林水産省では、麦、大豆について、需要の強い品質のものが効率よく生産されるよう新しい対策を用意し、生産意欲の向上と生産増大につなげようとしているようだ。農家の生産意欲の向上には第一に所得の向上が、次に省力化、快適化された生産技術体系が必須であるが、技術体系はほぼできていると思われる。農家が意欲をもってその技術を実行すれば、麦についての品質向上、反収増が、大豆にあっては反収増、均質化が必要という大きな課題も解決の方向に向かうであろう（小麦についてはもう少し品種改良が必要のようであるが）。病虫害、雑草防除はその技術の主要部分を占め、これなしには高い水準の生産はできない。このことは全国麦作共励会、全国豆類経営共励会の表彰農家の実績をみればすぐわかる。農薬を使わないのが時代の流れのように誤解している向きも見受けられるが、麦、大豆の例をみるまでもなく、農薬は生産性向上、安定生産に大きく寄与することを通じて今後の農政の基本となる食料自給率の向上にはたす役割は大きい。もちろん人の安全、環境の保全と両立することが必要であり、そのため厳しい農薬登録制度があり、また正しく使う必要もある。難しいときを迎えているが農業関係者一同国内農業生産の増大を期待し、技術開発に意欲を燃やすことが大事だと思う。